

「紅樓夢」における探春の特殊性について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山村, 幸枝 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/761

『紅樓夢』における探春の特殊性について

山 村 幸 枝

1 序

『紅樓夢』の面白さは「夢のような」華やかな大観園の様子と、知らないうちに進んでしまう賈家の没落の「現実」とが上手く対比されているというところにある。美しい風景、きらびやかな生活、そして「夢見るように」暮らす少女達。しかし彼女達の知らないところで「現実」は日々近付いてきており、何時か彼女達に襲いかかるのである。それを知っているのは「醒めている」作者と読者しかない。「醒めている」読者は『紅樓夢』の世界の「夢」と「現実」を知っている。作品の端々に埋め込まれた「要素」から読み取るのである。

筆者がこのように『紅樓夢』を読み進めていくうちに作品中からある一人の人物が浮かび上がった。探春である。「醒めている」読者である筆者は作品のあらゆるところに施してある賈家没落の「要素」、それらの不吉なものに不安を感じながら読んでいる。しかし登場人物達はそれに気付かぬ様子で栄華を楽しんでいる。その中で、探春は作品中の人物でありながら筆者の不安と同様の不安を持っていた。具体的にいうと賈家の没落に気付いていた。賈家の行く末に不安を感じる探春の言葉は筆者の気持ちを代弁するようなものであった。

先の「夢」という言葉を使うと、探春は他の大観園の少女達のように、完全に「夢に酔って」はいないように感じる。迫り来る「現実」に気付き不安を感じている。しかし完全に「醒めて」いるわけでもない。探春もやはり『紅樓夢』の登場人物なのであるから。

大観園は爛れた賈家の「現実」から切り離された、「夢の世界」である。まさにそれは天上にある「太虚幻境」の地上における具現である。「大観園」と「太虚幻境」のことを比べて考えるとき、筆者は荘子の「胡蝶の夢」という言葉を思い浮かべてしまう。「大観園」と「太虚幻境」は胡蝶と荘子のような表裏関係にあるのではないだろうか。そしてこの表裏関係は『紅樓夢』のもう一つの対比、賈家と甄家にも当てはまるように思える。

このように『紅樓夢』の世界を見ていくと「大観園」対「賈家の現実」という、相反するものの対比と、「大観園」対「太虚幻境」、「賈家」対「甄家」という同質のものの対比をその中に見いだすことができる。

このように『紅樓夢』は、「彼の小説は、全体が緊密な構成を以て組み立てられており……」と松枝茂夫氏がいうように、作者である曹雪芹によって細かく計画されて描かれたものである。中国の小説の中でこのような一貫した構成があるものは珍しい。『紅樓夢』が近代小説の走りであるといわれているのはそのためであろう。

筆者はこの文章で、「酔って」も「醒めて」もないという特殊な位置にある探春が、この『紅樓夢』の緊密な構成の中でどう位置付けされているのか探してみたいと思う。

2 金陵十二釵正冊と紅樓夢十二支曲

大観園の世界が太虚幻境の地上における具現であることは序文で触れたとおりである。故に大観園の構図はそのままそっくり太虚幻境にあると考えることができる。そして、この太虚幻境では『紅樓夢』の全ての構図も語られている。

『紅樓夢』の物語の中で太虚幻境と大観園が初めて接するのは、第5回の宝玉の夢の中においてである。この宝玉が見る「金陵十二釵正冊」と彼が聴く「紅樓夢十二支曲」の中に金陵十二釵、つまり大観園に住む少女達の運命はあらかじめ示されている。

探春は金陵十二釵であるから、この第5回を詳しく見ることにより、探春の大観園における位置、ひいては『紅樓夢』における設定をあらかじめ知る

ことができる。

まず「金陵十二釵正冊」の探春についての部分を見てみる。

后面又画着两个放风筝，一片大海，一只大船，船中有一女子掩面泣涕之状，画后也有四句写着道：

才自精明志自高，生于末世运偏消，
清明泣涕江边望，千里东风一梦遥。

この部分からは探春の運命についてのいくつかの暗示が得られる。

まず、描かれてある図からは「風」と「船」というキーワードが読み取れる。これは探春の不安定な立場を思い起こさせる。「風」と「船」とはそれを繋ぎ止めるもの、前者は糸、後者はとも綱が切れればどこかへ流れていってしまうものなのであるから。さらにこの「船」のイメージは次の詩の第3句の「江辺」にも繋がる。第3句と第4句は遠方から祖先を祭ることを表しており、探春が遠方へ行ってしまうということを暗示している。

第1句からは探春が才能を持って生まれたことと志が高かったことが対句的に述べられており、この対比が探春の中で重要であるということを暗示している。そして第2句からは探春が結局辛い運命を辿ることが読み取れるのである。

次に「紅樓夢十二支曲」の中の探春の曲を見る。彼女についての曲は「分骨肉」と題され、次のようなものである。

[分骨肉]

一帆風雨路三千，把骨肉家園，齊來拋閃，
恐哭損殘年，告爹娘休把兒懸念，
自古窮通皆有定，離合豈無緣，
從今分兩地，各自保平安，

奴去也，莫牽連，

題からわかるようにこの曲は肉親と別れることをうたったものである。はじめの二句は、遙かな「海路」を隔てた遠方に探春が行ってしまうことを「金陵十二釵正冊」と同じように暗示している。しかし次の二句以降では自分が遠く離れていくことに対して、彼女は父母に悲しまないでくれと求めているだけで、彼女自身の悲しみについては余り感じられない。このことから、探春は自らが遠方に行くことには余り悲しみを感じてはいないが、自分が去ったあとの父母、つまり家のことを心配するということが読み取れる。それにより、探春が家のことを非常に気に掛けていたということがわかる。

次章からは、これらの暗示の中から「才能と志の対比」に焦点を絞り、どのように『紅樓夢』本文で実現しているかを探ってみたい。

3 探春の人物像

ここで、探春の人となりについて、少し触れておきたい。

まず、探春の性格について述べる。第27回では、彼女はこづかいを宝玉に預けて、玩具を買ってきてもらう。その時彼女は女の子の好むようなものではない、手籠や香盒などを望んだ。飾り気のない、素朴なものを好んだのである。また、第40回の探春の部屋の記述のその広々とした様子は彼女の心の広く、寛大なことを示しているし、筆帳や筆が整然と並んでいる様子は、その志の高さを表している。

あわせて考えてみると、探春には女性らしくない、男子のような気質が備わっているように感じる。そのことを表す象徴的な言葉が第55回にある。

我但凡是個男人，可以出得去……

この言葉の影にはいつも家を出たいと思っていた探春が見える。そして男だったらそれは可能であったというところに、彼女の気持ちも感じられるのである。

次に、「金陵十二釵正冊」で「精明」とうたわれた探春の才能と、「高」とうたわれた志について述べる。

探春の才能は「迎春、探春、惜春の三姉妹の中では探春が飛び抜けている」(第18回)という詩才と、家政の代行によって発揮されたような家を取り締まる才能に別れる。この内、詩才については筆者の手に余るので触れないことにして、家を取り締まる才能について扱っていきたい。

第55回で病気になった熙鳳の代わりに探春が家政を執り行う者として選ばれたのは、「事務の才がない」李纨を助けるためであった。ということは彼女にはその才能があったということである。彼女はその機会に「利を興して弊を除いた」大観園の改革を行ない、家内の毎月の手当を削減するなど経済面での改革を推し進め、その才能を発揮した。

この回で発揮された探春の才能は、大観園内での行動にもあらわれている。第37回に海棠社を発起して、大観園に住む少女達の交流の場を作ったこと、また第62回の宝玉、宝琴、邢岫烟、平児の誕生会の指揮をかってでたことなどがそうである。これらの行動は姉妹のまとめ役、中心人物としての探春の器量を感じさせ、さらに大きい、家という単位を取り締まる才能の裏付けとなるものである。

さらに、探春の志について考える。志という言葉は様々な意味に取れるが、筆者はここでは敢えてプライドという意味で取った。とすると第5回の「志が高い」は「プライドが高い」ということになる。

彼女のプライドの高さは第74回で王善保の家内に裾を捲り上げられたとき彼女をぶったことや、第55回でのその母趙氏とのやり取りの中の

誰家姑娘們拉扯奴才了！

という言葉から読み取れる。

第65回で興児が尤二姐に対して、探春を紹介するのに「美しく、香りが良く、みんなに好かれるが、刺があって刺す」「玫瑰の花」であるといったが、

これも探春のことを上手く言い表している。

「才」と「プライド」という言葉を使わせてもらおうと、美しく、香りが良いのは「才」、刺が刺すのは「プライド」によるものだと考えられる。

第5回の「金陵十二釵正冊」はこの二つが対句の様に対比されていた。どうして才能があるということとプライドが高いということが対になっていたのか、探春のプライドが高くなった理由を調べることで探っていきたい。

4 生母趙氏との関係

探春を知る上で欠かせないのが、彼女の生みの親である趙氏との関係である。第55回の熙鳳の

只可惜他命薄，没托生在太太肚里。

という言葉や、第65回の興兒の

可惜不是太太養的，‘老鴿窩里出鳳凰’，

という言葉にみられるように、周囲の人物は彼女が王夫人を生みの親として持たなかったことを残念がっている。

というのも、探春の生みの親である趙氏は誠につまらない人物として描かれているからである。第67回で、趙氏は王夫人に取り入ろうとしたところ、全く相手にしてもらえず、部屋に戻ってから物に当たって怒っている。

このように趙氏は賈家では誰も相手にされない人物なのであるが、それは彼女が自分のことしか考えず、騒ぎ立ててばかりいるからである。それが顕著なのは第55回の出来事である。探春が家政を執っていたとき、彼女は賈家のしきたりに従って、亡くなった趙氏の弟である趙国基への見舞金の額を決めた。ところが、趙氏は亡くなったのは自分の弟であり、見舞金の額を決めることができるのは自分の娘であるのだから、しきたり以上の金をくれて

もよいではないかと怒鳴り込んでくるのである。

また、第60回の、賈環が薔薇硝にかわって茉莉粉を持たされた事件にも同じく趙氏は腹を立てて怒鳴り込み、女中と取っ組み合いの喧嘩をしている。このように趙氏は自分のことしか考えられない分別のない人物なのである。

このようなどうしようもない人物である趙氏を生みの母親に持つ探春は強い不満を感じている。それは第27回で宝玉に対して趙氏の考えは「卑しくけちくさい考え」であるといっていること、先に述べた第60回での騒ぎのあとで彼女が「ちっとも体裁というものを考えず、人のいうことをすぐに真に受けて、しかも自分の考えが全くない」と尤氏と李紈にこぼしていることからわかる(その他の箇所にももちろん数多くある)。

それもそのはずで、趙氏が騒ぎを起こすとそのとぼっちは探春が受けるのである。第55回などは直接探春にその矛先が向いていたし、第60回などのように探春の全く知らないところで騒ぎが起きても、結局は彼女が出向いて始末をつけなければならないこともあった。その度に探春はいやな思いをしたであろう。たとえ探春が関わらなくても、賈家の人々は趙氏が彼女の生みの親であることを知っているのだから、誰かが彼女の耳に入れたであろう。そのために探春は恥ずかしい思いをし、肩身の狭い思いをしたに違いない。第55回の熙鳳の言葉に、

太太又疼他，雖然臉上淡淡的，皆因是趙姨娘那老東西鬧的，心里却是和宝玉一樣呢。

や同じく第56回での

李紈等見他說得懇切，又想他素日趙姨娘每生誹謗，在王夫人跟前，亦為趙姨娘所累，也都不免流下泪来。

とあるように、周囲の人々も趙氏のために探春には素っ気なくせねばならなかったのである。探春もそれを知っていて、実際に第55回では自分は趙

氏のせいで肩身の狭い思いをしているとはっきり口にはしている。

この親子は結局最後まで互いに恨みを持ったままで別れる。第100回で探春が遠方に嫁ぐと決まったときに趙氏は探春のところへ乗り込んで、

就是養了你一場，并没有借你的光儿。

という。趙氏は結局自分のために探春を利用することしか考えていなかったのである。また探春にしても、

我這個極頭在家忒瞧不起我，我何从還是个娘？比他的極頭還不濟瞧，況且湊上水，護着別人。

という言葉のように、もっぱら王夫人のほうに近付き、趙氏のことなど齒牙にもかけていない。

このように探春は賈家の中では認められているのに、趙氏が事あるごとに騒ぎ立てるので、肩身の狭い思いをしなければならないことに強い不満を感じている。しかし、趙氏は探春の生みの母親だから完全に無視することも不可能なのであった。

5 二重性の自覚

小濱陵一氏は「『紅樓夢』——その内なる軋み——」の中で探春と林黛玉について取り上げ、そこから曹雪芹にとっての『紅樓夢』を書く意味についての考察をしているが、その中での探春の特殊性に対する見解が筆者には適切であると思われるので、ここでその見解を紹介する。

しかし、探春になると事情は全く異なってくる。庶出という「非正統」性を背負って賈家に在る以上、その「非正統」性を自らの負性としてとらえ、さらに何らかの形でその負性を支えなければならない——その自覚こそが、先祖のきまりにあくまで固執することに象徴されるように、

「賈家の人間」にふさわしい完全無欠な行動を強いるのである。つまり賈の姓を名乗るから賈家のものだけでは済まされない内的な不安定さが、そう信じ込むことのできる人々（賈姓でなくとも、嫁いできたり奉公してきたりして賈家に存する人々を含む）以上に「賈」的であるように強いる。そしてその「賈」に対するウルトラな心情が自らの外に向けられたとき、彼女は「賈家の人間」としての自覚を欠いた人々に対して倫理的嫌悪感を抱かざるを得ない。それは「自殺自滅行為をしでかす」(第74回)人間への嫌悪感であり、「家の崩壊」の認識に繋がっていくものである。

さらにこのあと、林黛玉のことも合わせて次のように続く。

賈家という世界で生きていく大勢の人々のなかから黛玉と探春が浮かび上がるのは、彼女達が「存在の二重性」という、その世界を自己意識の内部で再構成する契機となり得る位相を持ち、しかもそれを契機となし得た、つまり賈家の内包する関係の総体を視野におさめることができたからである。

筆者はこの見解を趙氏対探春という関係から捉え直してみたいと思う。

探春は「賈家のお嬢様」として存在していながら、肩身の狭い思いをしなければならない。「庶子、しかも趙氏の子」であるからである。その認識はかえって探春の「お嬢様」であるというプライドを高めた。「庶子」であるという事実を負い目を感じ、その負い目をそれと釣り合うべきプライド（賈家のお嬢様であるという自意識）で支えていたからである。周囲の者が彼女を「庶子」であるといって馬鹿にするのを彼女は許さなかった。第74回で王善保の家内に裾を捲り上げられたとき、探春は猛烈に怒って彼女を打ったようである。探春は王善保の家内が「庶子」だからといって自分を馬鹿にするところがあるのを敏感に感じ取っていたのである。

ここで比較される人物が賈環と林黛玉である。

賈環は姉である探春に反し「庶子」であるということに負けてしまっている人物である。彼は第55回で熙鳳がいうように、「毛を焼き焦がしてごえた子猫みたい」であり、庶子であることに甘んじ、賈家の「正統」に相応しくなろうとしない。自分でも嫡子の宝玉にかなわないということを実感している。

黛玉は探春によく似た境遇から「お嬢様」というプライドを高めた人物である（そのことについては前に紹介した小濱氏の論文で詳しく述べられている）。黛玉は富貴の家に生まれたが、父母ともに早く亡くなってしまったことにより賈家に身を寄せている（黛玉の母は賈母の末の娘なのである）。余所の家に世話になっているという意識から、彼女は周囲の目を必要以上に気にするようになった。それが黛玉の「多愁多感」に繋がったのである。人の家に世話になっているという意識が絶えず彼女に付き纏い、他人の言動に非常に敏感に反応するようになった。第26回で黛玉が宝玉を訪ねたとき、晴雯が戸を開けなかったことに対して、

雖説舅母家如同自己家一樣，到底是客辺，如今父母双亡，无依无靠，
現在他家依栖，若是認真愜氣，也覺沒趣。

と考え、泣くのである。また第45回では、薛宝釵が林黛玉に精がつくようにと燕の巣を食べるように勧めたところ、自分はこれまでに体の具合が悪くて散々世話になっている。これ以上のことをいうと下働きのばあや女中に毛嫌いされると遠慮している。

さらに宝玉と熙鳳のことを引き合いにだし、

何況于我？況我又不是正經主子，原是无依无靠投奔了来的，他們已經多嫌着我呢，如今我還不知進退，何苦叫他們呪我？

といている。この他にも薛宝釵と薛未亡人、薛宝釵と宝琴のことを見て「自

分には肉親がない」と羨んだりしているし、第83回では老婆が孫を叱っている「よくもこの園に入り込み、引っ掻き回しやがって」という言葉を聞き、自分に対する当て付けだと思ったりしている。

このように林黛玉は「余所の家の世話になっている」という特殊な立場から、他人の目をいつも必要以上に気にしていた。それにより外界の刺激に対して敏感に反応するようになったのである。

探春と黛玉の同じような立場というのは、前者が「庶子」であり、後者が「余所の家に世話になっている」というように、賈家の中では特殊な立場にあるという自覚である。探春は庶子であるということから、自分が「本当の賈家の人間」でないことを感じていた。嫡子に対する庶子は家制度の中では「正統性」を持たないからである。正統でないということは、厳密には「賈家の人間」ではないということである。「賈家の人間」でもないものが「賈家」に組み込まれている。この意識により探春も黛玉のように必要以上に他人の目を気にしていたのである。他人の目を気にすることは同時に他人のことを伺うということである。そしてそこから自分の位置を模索するということである。探春の「目」は賈家の統治者である賈母を探り、王夫人を探り、賈姓を取り仕切る熙鳳を探り、さらに自分達に使える女中や下働きの者を探る(この探るという漢字は探春の探という字と同じである)。馬鹿にされていないか、厄介者扱いされていないかということを常に気にして緊張している。

そしてその「目」は賈家の様々な問題点を見つめる。それらは没落の「要素」である(さらに探春は家政の代行によってそれらの「要素」と真っ向から向かい合わなければならなかった)。そして探春はそれらの「要素」を見つめ、考え、自分の中で、再構成することによって賈家の没落を予見し得たのではないだろうか。

6 適切な状況判断

探春は周囲に常に気を配り、自分の立場を模索していたため、適切な状況判断力を身につけることができた。『紅樓夢』全体を通じて、彼女の周囲を観

察する目はかなり鋭い。その例をいくつか挙げる。

第46回の賈赦が鴛鴦を妾にしようとした件で責められる王夫人をとりなす場面では、

探春有心の人、想王夫人雖有委屈，如何敢辯，薛姨媽現是親姉妹，自然也不好辯，宝釵也不便為姨媽，李紈、鳳姐、宝玉一毫不敢辯，這正用着女孩儿之時……迎春，惜春……因此，窗外聽了一聽，便走進來陪着向賈母道：

とあり、かなり適切な状況判断をしている。また第50回の、

探春早已料定没有自己関的了，便早写出来，因說“還沒収住呢。”

は、周囲の状況に自分の状態をもあわせて判断している。さらに、第62回や第83回の

探春見他們来了，便知其意，忙笑道：“你們又不放心，来查我們来了，我們并没有多吃酒，不過是大家玩笑，将酒作引子。媽媽們別耽心。”

探春会意，開門出去

のように、他人の考えも見抜いてしまう。

さらに、第75回では、

探春冷笑道：“這種遮人眼目儿的事，誰不会做？且再瞧就是了。”

とあるように、すでに先行きを見通してかなり皮肉っぽい台詞を口にしている。

また、林黛玉の臨終のとき駆け付けたのは呼ばれた李紈を除いては彼女だ。

けであった。

探春の優れた状況判断は、このように周囲に対する気遣いという面でも十分に発揮された。それにより探春は周囲の信頼を得てきたのである。

7 賈家の没落の予見

探春が賈家の没落を予見したことは第5章で述べた。彼女の予見は作品の中では第74回の大観園搜索の場面と第94回海棠の狂い咲きの場面に最もわかりやすい形であられる。この二回では皆と同じ体験をしながら彼女だけが賈家の没落に気付いていた。この章ではこの二つの場面を詳しく見ていきたい。探春の特殊性について考えてみたい。

まず第74回の大観園搜索であるが、探春はその搜索の一行を迎えるときから他の大観園の住人とは違っている。あらかじめ搜索のあることを知っていて「燈をかかけ、門を開け」一行を出迎えたのである。他の人々が眠っていたり、何が起きているのかさえわからず、おろおろしている中で、探春はとっさに「訳があってこういう醜態になった」と察して、迎えうったのである。

また熙鳳達が部屋に入ってきてからも素直に調べさせたりはしない。

我們的極頭自然都是些賊，我就是頭一个窩主。

と冷笑し、言い放つのである。この台詞から彼女の怒りが感じられ、搜索に抵抗しようという姿が見える。「お嬢様」である自分が泥棒扱いされ取り調べを受けなければならない屈辱はプライドの人一倍高い探春には堪え難いものであったろう。それは熙鳳が愛想笑いをして「怒らなくてもいいじゃないの」といわざるを得なかったほどである。さらに探春は熙鳳にむかって、

你們今日早起不是議論甄家，自己盼着好好抄家，果然今日真抄了！咱們也漸漸的来了！可知這樣大族人家，若从外頭殺来，一時是殺不死的，

這可是古人說的，‘百足之虫，死而不僵’，必須先从家里自殺自滅起来，才能一敗塗地呢！

というように、甄家のことを引き合いにだし、この搜索は「自殺自滅」行為であるとし、このような行為により家が崩壊してしまうといている。このように大観園搜索という他の姉妹達はただうろたえるだけのこの場面で、探春は甄家のことを思い出し、甄家の行く先と賈家のそれを繋ぎ合わせている。『紅樓夢』の世界では甄家と賈家は対になったものであり、甄家に起こることは賈家に起こることの前触れである。そのことを探春が知っていたと、はっきりとはいえないが、彼女が先の甄家の家内搜索に続く財産の没収と、賈家の大観園搜索というそれぞれ独立した事件に当たり、それらを自分の中で再構成して「甄家」対「賈家」という構図を作り上げていたとはいえないだろうか。だからこそ、とっさに彼女は甄家のことを引き合いに出し得たのではないか。

次に第94回の海棠の花の狂い咲きの場面を考える。枯れてしまってから一年以上経つ海棠の花が季節外れに咲いたことに対して、賈家の人々はそろって吉祥であるとして喜ぶ。しかし探春はそうは思わない。

必非好兆，大凡順者昌，逆者亡；草木知運，不時而發，必是妖孽。

と考えている。この頃は賈家の没落が徐々に進んできていて、探春の不安はさらに強いものとなってきている。そこへこの海棠の狂い咲きである。彼女は時期外れに花が咲いたということから「順う者は栄え、逆らう者は亡びる」というような論理を持ち出し、それに基づいて悪いことだと判断している。この論理が正しいか正しくないかは別としても、「根拠」を持ち出すというところに探春の聡明さがあらわれている。

何となくよい気がしないということなら王熙鳳も賈母も感じているのである。だからよけい「良いこと」にして「喜」んでいるのである。賈母はその場では吉祥だとして「喜」んでいるが、次の第95回で

你知道我的意志麼？我為的是園里人少，怡紅院的花樹忽萎忽開，有些奇怪。

と王夫人にいらっているように、実は海棠の狂い咲きに不安を感じていたのである。しかしそれは「何だか」という程度でしかないけれども。また熙鳳は自分でやっては来ないが、平儿に赤い襦子を持っていかせ襲人に次のようにいわせている。

奶奶說，這種花儿開的怪，叫你們鉸塊紅綢子挂挂，就応在喜事上去了，以後也不必只管当作奇事混說。”

このように熙鳳もわざと「良いこと」にしているが実際には不安を感じている。しかし賈母と同様に「何だか」という程度でおわっている。

それに対して探春は「何だか」では済ましていない。彼女なりの根拠を持ち出して「きっと」良いことではないと判断している。

実際このあとの第95回では宝玉の「通靈宝玉」の紛失、元春妃の逝去と悪いことが続いている。宝玉の存在の源ともいべき「通靈宝玉」と賈家の繁栄の基盤となっている元春妃が失われたということは賈家にとってはまさしく没落の前兆である。この場面でも、

那知探春心里明明知道海棠開得怪異，“宝玉”失更奇，接連着元妃姐姐薨逝，諒家道不祥，日日愁悶。

とあるように、探春が前回の海棠のことを含め、いくつかの出来事を結びつけて賈家の没落を予見していたことがわかる。このような総合的な見解も探春の鋭い現実認識とその再構成力からくるのである。

賈家の没落の前兆は物語中のあらゆる場面に細かいエピソードとしてちりばめられているが、それを取り込んで自分の中で正しく再構成し得たのは探

春だけである。そのことはこの二つの事件の彼女の受け取り方に特に明らかに見られるのである。

8 『紅樓夢』の構成の中の探春の位置

序文で述べたように『紅樓夢』の物語は「大観園」の世界と「賈家の現実」の世界の二つに別れる。

「大観園」の世界は大観園の女性達の生活であり、「賈家の現実」の世界は賈家の繁栄から衰退へと向かう経過である。加藤知彦氏がその「『紅樓夢』の構成について」の中でいうように、曾虚白氏の言葉を使って前者を「人系」後者を「家系」と呼ぶことにしよう。『紅樓夢』は「人系」の展開と「家系」の展開が互いに作用しながら平行して進んでいくという構成になっている。以上のように、物語を「人系」と「家系」の二つに分けたときの探春の位置を考えてみることにする。

「人系」の舞台は大観園である。そして「家系」の舞台は賈家である。大観園に住む探春は、「人系」に属すのだろうか。たしかに探春は詩社を興すなど他の姉妹との交流も深いので「人系」に相応しいように思える。しかし、加藤知彦氏は探春を「園の女性でも家系に連なる」といつている。そういわれてみると、熙鳳に代わって家政を執り、大観園の改革を思いつくなど彼女は「家系」的であるともいえる。探春はどちらに属すのが本当なのだろうか。

結論から言うと、筆者は、探春は「人系」と「家系」の間に位置すると考える。「人系」と「家系」は物語の中で互いに関係しあい、複雑に絡み合いながら展開していく。二つは全く分離しているものではない。もとを辿れば繋がっているのである。しかし分かれている以上、合流させるためには「人系」と「家系」を引き合わせるものが必要である。それが探春ではないだろうか。探春はこの二つの「系」を不自然に感じさせないように上手く繋ぎ合わせる役目を果たしているのではないか。

ここで「人系」と「家系」の両方に関わる人物として王熙鳳などが浮かび上がってくるが、王熙鳳では二つの「系」を繋ぐことはできない。なぜなら

彼女は「家系」の典型であり、代表人物であるから、その属する「家系」によって縛られてしまい身動きがとれない。故に繋ぎ目となる人物は、それぞれの「系」に深く関わり、かつ「系」の代表人物ではないことが要求される。そしてその要求にこたえられる登場人物は探春をおいてほかにはない。彼女はその生まれから、どちらの「系」にも完全に組み込まれることはないのであるから。

探春のこの微妙な位置は彼女の現実認識の的確さからもわかる。というよりも彼女が賈家の現状を正しく判断し得たのは「二重性の自覚」から得た認識力（再構成力）と、加えて『紅樓夢』構成内のこの特殊な位置にもあると筆者は考える。賈家の現状をしっかりと把握できたのは、探春が賈家の話の展開、つまり「家系」に完全に組み込まれてはいなかったからである。賈家の世界を完全につかむには賈家の世界を外側から見なければならない。探春も賈家の人間であるから完全に賈家を離れて外側に行くというのは無理である。しかし、「人系」と「家系」の間という特殊な位置からは、両方の「系」をある程度把握できるだろう。二つの「系」が合わさった賈家の世界でもある。どちらかひとつを完全に知るというよりも、どちらもある程度わかるということのほうが、二つの「系」が合わさった形である『紅樓夢』の世界を偏りなく把握することができる。全く関わりがなかったら、その関わりを持たない「系」について目を向けることはないし、かといって縛られてしまったら、その関わりを持つ「系」を客観的に見ることは不可能である。二つの「系」を把握するという事は、ある程度関わりがあってしかも完全に組み込まれない探春という特殊な生まれ（「庶子」であること）を持ち、特殊な考え（「二重性の自覚」）を持つ人物の位置からしかできないのである。そして彼女は「人系」でもあり「家系」でもあり、同時に「人系」でもなく「家系」でもないというこの点でも二重性を抱えているのである。彼女はこのような特殊な位置にいて、二つの「系」を無理なく結び、物語の展開を助けているのである。

彼女の「二重性の自覚」によってもたらされる予見（大部分は賈家没落の予見であるが）は物語の展開を助けているだけではなく引っ張っているとも

いえる。先に述べた第74回の大観園搜索で「甄家」のことを引き合いに出したことなどは、作者が彼女に物語の方向付けを託していることのあらわれではないだろうか。ここで『紅樓夢』の構成についてもう一度時間的な流れによって区切るとすると、加藤知彦氏は次のように分けている。

前編	第1部…第1回 ～第18回
	第2部…第19回～第36回
	第3部…第37回～第54回
後編	第4部…第55回～第72回
	第5部…第73回～(第80回)

まず大きく前編・後編と二つに分かれ、さらにそれぞれが三部・二部と全部で五部に分かれる。

前編では賈家の繁栄の様が、後編ではその没落の様が描かれている。第55回は何度も出てきたように、探春が熙鳳に代わって家政を執った回である。この前編と後編を繋ぐ重要な場面に彼女が重きを占める人物として活躍すること、筆者は何らかの意味があるのではないかと思わずにはいられない。「人系」と「家系」の橋渡し的存在である探春は、前編と後編の橋渡しをしているのではないだろうか。第55回で探春が大観園に「実益」という本来「家系」に含まれるものを求めたため、大観園はそのバランスを崩したのである。そしてそれが賈家の栄華から没落へ向かう分岐点となった。

それだけではない、前編の第2部と第3部の区切りは36回であり、海棠詩社の結成が境なのである。そしてこの詩社の結成は探春の発起によってなされている。この詩社の活動により大観園は華やかさを増す。また、後編の第4部と第5部との区切りである第73回の次の回である第74回は海棠の狂い咲きについて述べられた回であり、この回にも探春が重きをなしているのはいうまでもない。そしてそれを境に賈家の没落は決定的なものになっていくのである。

このように見ていくと、探春の存在は物語の連結部分においてよく目立つ。

このことより筆者は彼女が物語の展開を無理なく結ぶという役目を担っていたと考えるのである。さらに、これまで述べたように賈家の没落の予見ということを通じて、物語の方向性を示す役割をも担っていると考えられる。そしてそれらの全ての役割は探春が「二重性の自覚」から得た、他人を超越した世界観を持っているという彼女の特殊性に基づいているのである。小濱陵一氏も「この二重性の自覚はストーリーを展開させる原動力、創作の根源として『紅樓夢』の中に沈め込まれているのではあるまいか？」というように、探春は『紅樓夢』の構成においてポイントとなる位置にいるのである。

9 結論

以上、探春が『紅樓夢』の他の登場人物から浮き上がっていることについて考えてみた。探春が才能がありながらも「庶子」であったこと、そしてそれからもたらされる「二重性の自覚」とこの自覚に起因する「正しい現実認識」、つまり賈家の没落についての予見、それが探春と他の登場人物の違いであった。さらに『紅樓夢』構成中の探春の位置、役割からも探春の特殊性がわかった。

探春はあらゆる意味で「間」の人であった。「賈家である」と「賈家でない」との間、「人系」と「家系」の間、それから物語の展開と展開の間、衣服の縫い目が目立つように、探春は『紅樓夢』世界の縫い目だったから浮き出たのである。

このことを考えるとき、筆者は探春の孤独を感じずにはいられない。「人系」と「家系」のときにも述べたように、どちらにも属すということは、どちらにも属さないのと同じことである。探春は『紅樓夢』の登場人物であるから『紅樓夢』に属す属さないは別として、「賈家である」と「賈家でない」の間、「人系」と「家系」の間に中途半端な状態で留まっているというのは大変な苦しみではないか。それこそ「口ではいえない、一段と辛い悩み」(第7 1回)なのかもしれない。

探春の現実認識が適切であるということは彼女の視野が広いということである。つまり他の登場人物の見ている世界より、ひとまわり広い世界を見て

いるということである。そしてそれは読者の見る世界により近いということを示す。筆者が初めに感じた探春に対する親近感はこのような視野の重なりによって生まれたのかもしれない。もちろん筆者は探春を含めたもっと広い『紅樓夢』という世界を見ているのだが。この点で筆者はまた探春を他の登場人物と読者である筆者の「間」に位置付けてしまうのだが。

探春はやはり「間」の人であった。

参考文献

中国語原本

『紅樓夢』曹雪芹・高鶚著 人民文学出版社 1992

日本語訳

『紅樓夢』伊藤漱平訳 平凡社 1969

『紅樓夢』松枝茂夫訳 岩波書店 1985

『紅樓夢』飯塚朗訳 集英社 1980

研究書

『紅樓夢人物論』大愚著 上海国際文化服務社 民国38

『紅樓夢縦横談』林冠夫著 広西人民出版社 1985

『紅樓夢注評』毛徳彪編 広西人民出版社 1988

『紅樓夢人物辞典』施宝義編 広西人民出版社 1989

『紅樓夢注解』毛徳彪編 広西人民出版社 1981

『紅樓夢入門』蔣和森著・小川陽一訳 日中出版 1985

『紅樓夢研究集刊第6集』中国社会科学院文学研究所 紅樓夢研究集刊編委会 上海古籍出版社 1981

『紅樓夢研究論叢』社会科学戦線編集部編 吉林人民出版社 1980

小濱陵一「『紅樓夢』——その内なる軋み——」 『中国文学報』第30冊 1970

加藤知彦「『紅樓夢』の構成について」 『中国文学報』第4冊 1956